

公園における市民活動の継続の要因 古河総合公園を事例として

山村美保里

学生会員 東京工業大学大学院社会理工学研究科 (〒152-0033 東京都目黒区大岡山2-12-1 W-9-93
mail:yamamura.m.ac@m.titech.ac.jp)

公共空間における市民活動は活発に行われているが継続は難しく課題である。本研究では茨城県古河市の古河総合公園の市民参加に着目し、公園が発行している「古河総合公園だより」の分析と、長く市民活動を続けている地域住民にヒアリングを行って、公園空間での市民活動が続いている要因を明らかにすることを試みた。その結果、市民活動をサポートする要員が長期に公園に関わることが重要であり、また参加者が固定されていることの利点欠点のほか、価値観の違いによる市民活動への影響などの新たな課題も明らかになった。

キーワード: 市民活動 継続 公園 パークマスター

1. はじめに

(1) 背景と目的

身近な環境をより快適にするための市民活動は様々な成果をあげているが、その継続は難しく、発起人の引退とともに消滅する活動は多い。それは次世代との問題意識の違いや、環境の変化などによって活動の目的が変化すること、また都市化した地域ではコミュニティが希薄であることなどが挙げられる。

不特定多数の人が集まる身近な都市施設の一つに公園がある。中村は、近代日本が整備してきた西洋由来の公園の意義を認めつつ、公共が担うが故の公平であることの矛盾を指摘している。さらに神社などの日本の伝統的な空間が、土地の歴史と地形を活かした場に立地し、そこが賑わいの中心となって地域一体に波及していた点に着目し、それらを近代都市公園に取り入れる効果を考察している¹⁾。中村は平成4年から、茨城県古河市の古河総合公園の御所沼再生を監修し、設計計画では地形と土地の歴史を根幹に据え、運営では公共空間の矛盾を超えた市民活動の在り方を模索した。御所沼を地相と人間双方の歴史から位置づけ、その沼を中心に公園を活用した市民の様々な活動が展開しすることを目指した²⁾。

本研究では、古河公園で行われてきた市民活動に着目し、それらが継続、発展するために必要な要因を抽出し、考察することを目的とする。

(2) 研究の位置づけ

市民活動に関する既往研究は豊富にあるが、歴史的な位置づけでは、椎木は戦前日本の民間社会事業等の内発的発展と戦後のそれらとを比較して、日本の市民活動の源流の解明を試みている³⁾。また松元は戦後の社会運動から住民運動、市民運動をへて市民活動の概念が形成される過程を明らかにし、さらに近年の市民活動の特徴を、行政と対立していた1960年代の社会運動とは異なり、ボランティアやネットワークを活用し、環境改善等の行政の業務と重複する目的であるため行政との協力関係を築くことが一般的で政治的イデオロギーを含まない傾向にあるとしている⁴⁾。佐々木らは、行政と協働して活動することを前提に、行政と住民との間に介在してコーディネートする主体に着目し、住民の要望等の情報の収集とそれらを行政の中の必要な個所に届けることの重要性を示した⁵⁾。藤木らは市民参加型の公園運営における協議会の果たす役割を分析し⁶⁾、古河総合公園において行政と市民との介在役であるパークマスターを勤めた菅は、市民の意向を公園管理に活かす手法を実践的に示した⁷⁾。これらの研究は、市民活動の歴史的な位置づけ及び市民の意向を取り入れる組織の機能について分析したもので、市民活動の継続や要因には触れていない。本研究では公園という公共空間において市民活動が継続するための要因を提示する点に新規性がある。

団体の活動であり、行政や公社の関与は、市民活動の継続の考察において考慮することとする。

3. 古河総合公園の市民活動の内容と傾向

(1) 古河総合公園だより

公園の出来事を記載した「古河総合公園だより（以下、公園だより）」は、2001年1月より毎月発行され2017年3月末で201回を数えた。本研究では公園だよりの記事をデータとして記載内容の分析を行った。記事の種類は、管理運営、催しやイベントの告知等を含めた公園内の出来事やお知らせである。以下に記載内容ごとの特徴を示す。

a) 管理

公園だよりで最も多いのが管理に関する記事である。御所沼や公園に散在する水辺の手入れ、樹木の選定や植栽、花壇の植え替え、園路や建物の改修などである。特に冬季に沼の水位を下げることや桃木の植え替えなどの市民にとって興味深い作業や、外来種の駆除等の公園の抱えている問題、オオヨシキリとう鳥のまわりの草を刈り残すなど市民が不思議に思うことなどについて、なぜそうしたことを行うのかという詳しい理由を付している。これを読んだ市民は、それらの管理の仕方を目にしたときに公園のしくみをより深く理解することができる。

b) 運営

公園工事完了後は、使い手である市民が創り手となって、整備と利用に参加してゆくことを目標の一つとしていた¹⁾。古河総合公園では2002年1月に「公園を活用していきたいという市民の声を取りまとめ、公園づくりに反映させていく」ため「みどりと遊びの会」が開始した。公園だよりには、活動の主旨と市民参画の公園づくりのスキームの試案、その後の公園での様々な遊びを企画実行の結果を掲載している。さらに2003年7月に古河総合公園公園づくり円卓会議（以下、円卓会議）が立ち上がり、以後基本的に会議は2ヶ月に一度開催されてい

る。円卓会議に関して公園だよりには、2007年までは開催日や話し合われた内容、主旨を付した参加の呼びかけが掲載され、2008年以降順次簡単な報告となった。また掲載回数は、2011～12年が6回と最多で、2013～14年に各1回、2015～16年は0回になったが、2017年は3回掲載と再度掲載が始まった。

c) 催し・イベント

古河総合公園には、桃まつり、新茶まつり、よかんべまつりの3つの大規模なイベントがあり、桃まつりは1977年、他の2つは2000年以降継続して開催されている。述べ参加者は数千人から3万人という規模で、それぞれ実行委員会等の大きな組織と予算がある。公園だよりに呼びかけや開催後の報告が毎回掲載されている。

一方、それらとは異なる市民の自発的で小規模な多様な催しの掲載もある。長く続いている活動の中で代表的なものは「どろんこクラブ」である。初めはやりたい親子の集まりで公園だよりにも時々掲載される程度であったが、2008年に市が運営する正式な団体となり、2009年から年間計画と参加者募集、活動の結果報告が常に掲載されるようになった。その他、ラベンターを摘んでグッズを作る教室、民家園での月見とススキの配布、クリスマスリースづくりなど、公園内で採れるものを活用した催しがあり、公園だよりには恒例の行事として掲載されている。また公方様の森の管理のために、公園が公募して講座を開いたことから始まった「もりもりクラブ」は、森の手入れや害草の駆除等の市民でできる管理作業のほか、植物観察会やキノコ栽培も行っており、2007年に発足後は活動を継続している。その他単年度掲載の活動も多く、コンサートやカヌー、鯉のぼりあげなど、規模や種類は多様である。

d) 他団体との交流

公園には、視察やインターン、小学校から大学まで野外授業など他団体の来訪が多く、公園だよりには来訪の日時や所属、公園の感想などを掲載している。2005～08年の間は特に多い。

e) 季節の変化

四季折々の公園の風景や、花、生き物など公園内の観察から得られる季節の変化が公園だよりに掲載されており、イベントに関係するものを除き全部で136の記事があった。月による変化では4～6月が少なく冬季は多い。これはイベントなど他の記載する内容の多寡によると考えられる。経年では2007年までが毎年10個以上の記事があったが、その後はやや減少し6～9個になり、2012年以降ほとんど見られなくなる。これはイベントの開催報告が中心になること、特に2012年以降は公園だよりが2頁から1頁なることによる記事数の減少も大きい。

f) その他

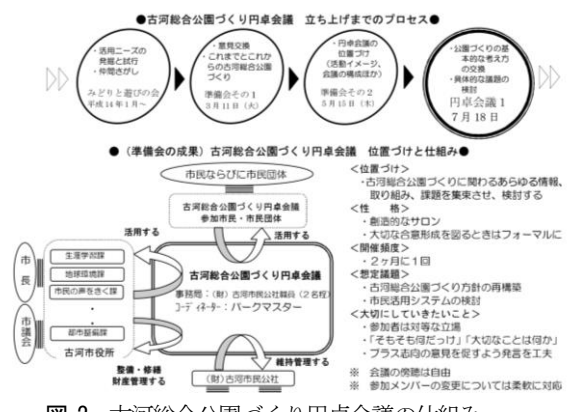


図2 古河総合公園づくり円卓会議の仕組み
古河総合公園だより 2003年6月号より抜粋

お知らせや公園利用における注意事項は必要に応じて常に掲載がある。2010年までは、“フクロウが来ている”“鰻がとれた”“石鹸の実のムクロジ”など公園内のニュースが多彩であった。2010年以降は、こうしたニュースが減り、一方で自転車の乗り入れ禁止やバーベキューのマナーについてなど注意事項が増えている。

(2) ヒアリング

古河総合公園において市民参加の活動が続いている要因を明らかにするために、市民として公園づくりに長く参加している野口氏と川田氏にヒアリングを行った。以下は、ヒアリングをまとめたもので、記名のないものは二人の共通の認識として話であったため発言者の記名は省略している。

市民参加の活動は、自発的に自分たちで企画する催しと、公園に企画してもらって参加するのでは大きく違う。例えばどろんこクラブはもともと公園で子どもたちを遊ばせたいという父母らの企画が始まりで、男性に参加してもらうために公園内に田んぼを作ってしまった。作った田んぼで、子どもたちが米作りを体験し、次に何をやりたいか考え、例えば竹があるから流し素麺をするなど、その時々で自由に行っていた。参加者は固定されていたが、同じ子供が複数年関わることによって、経験済みの子供が新規参加の子供にやり方を教えるなど子供同士の技術の継承がみられた。その頃の子供も今は大人になっており、当時の親子は今でも付き合いが続いている。一方、公園主催になった後は、年間計画を作り、行事は計画に沿って行い、参加者は毎年新規に募集するため固定していない。田植えなどの体験をさせたい母親が子供を連れて参加している。子供たちの中に経験者がいないため子供同士で教え合うことが無くなり、中にはふざけまわるだけの子もいる。クラブを終わった後の付き合いは続いているようである。野口氏は、公園管理者は公園ができることと守ってほしいことの条件を伝えて、あとは支援することが肝要ではないかと考えている。

公園でイベントを企画してみたい人はいるが、実行するまでには様々な手続きなど慣れないことが多く、結局やってみたいという漠然とした希望で終わることがほとんどである。市民活動が活発な頃は、パークマスターが必要なことをアドバイスして実行できた催しがあった。

社会で役立ちたいと考えている時間に余裕のある人は多いので、公園の管理のなかで簡単な作業をしてもらうことは大切だろう。そのために公方様の森の管理呼びかけの時のように、講座を開き、市報に載せて募集すると効果的だと考えている。川田氏は大学のシニア講座受講後、受講後は都内の大規模公園で受講修了者とともに管理業務を手伝っている。

パークマスターが常勤のときは、毎日公園を見回り、公園によく来ている市民からの情報提供があった。例えばシマアジガモなどの珍しい鳥が公園に来ると、野鳥の会などのネットワークによって大勢の野鳥ファンが押しかける。そのことを公園に教えてくれる市民がいなければ、公園は何も知らず、訪問者に鳥のことを聞かれてもわからない。現在の管理職員は短期的な勤務が多く情報が集まりにくい。公園に長く務める職員がいることで、こうした情報が集まってくる。

2005年に、古河市は隣の町と合併したが、文化的背景が違うため例えば管理では、旧古河市は市民の希望をきいて進める習慣があったが、合併した町は予め決めた内容を実行するように違いがある。その結果、例えば自然な状態を保つように下草を残していた管理を、雑草が生えているサボらずに刈ってほしいと言われたり、正面入口の二入川のせせらぎの土溜まりに蛙や手長エビなどの水生生物が多く棲みついていたので子どもたちのためにそのままにしていたが、土がたまっている状態は良くないと取り除いてしまった。考え方の違いは大きい。

古河総合公園は季節感を大切にしているが、季節の感じ方は人それぞれ違うと思う。毎日散歩に来ている人は小さな変化もよく知っている。川田氏は、沼の水抜きが始まると冬の到来を感じ、水位が上がってくるともうすぐ桃まつりだと感じる。また川田氏にとって御所沼の付近は“子供の頃からの生活の場、遊び場であり生い立ちの中で積み重なっている”特別な場所である。

4. 考察

市民参加による公園づくりを目標の一つに掲げた御所沼の復元から25年が経過した。公園だよりの記録がある17年間の間にも、活発に市民活動が行われたあるいは、思うように進まない時期など、多様な経験をしている。本章では、公園だよりとヒアリングでの分析をもとに、公園における市民活動の継続に必要な要素を考察する。

既往研究では、公共空間で市民活動を行うためには、行政・管理者と市民とを介在する中間的な組織が有効であると示されていたが、古河総合公園ではパークマスターと円卓会議が該当し、効果的に機能していたことが確認された。さらに中間に位置する職員が長期に務めることが重要であることが新たにわかった。市民が公園でやりたいことを実現するためには、行政のしくみを熟知し助言や支援できることが必要である。さらにヒアリングで職員が勤務期間の指摘があったが、短期間の勤務では市民が持つ様々な情報をどこに届けるのか、また新しく公園と関わりたいと考えた市民がどこに連絡をしたらよ

いかわからない。パークマスターの常勤か否かの期間では、公園だよりに紹介される活動や公園内の様々なニュースの数に違いがあった。つまり市民からの情報を集めて必要な人に届ける、あるいは新しく公園に関わりたいたと考えた市民が既存の活動とつながるためにも、介在する職員が長期間勤務することが必要であるといえる。古河総合公園ではさらに行政及び管理者、パークマスター、市民とが同じテーブルで話し合う円卓会議が、市民の要望がより取り入れやすいように働いており、活発な市民活動を促してきたものと考えられる。

次に、市民でできる公園管理の講座を公園が主催することがある。古河総合公園のもりもりクラブは、講座の開催と参加が始まりであり、また川田氏の東京の公園管理の手伝いの実績等から有効であると考えられる。公園主催の講座であれば活動募集が市報に載り人を集めやすく、講座受講は参加しやすいと考えられている。市民が管理業務を楽しみにできれば、公園管理者はそれらの経費を別の使徒に充てることができる。全国の自治体で予算が厳しくなるなか、市民参加の効果的な方法は、今後検討していくべきことと考える。

さらに、同じメンバーによる繰り返しの活動参加の有効性がある。どろんこクラブの例のように、毎年同じ子供が活動すると、経験者が新規参加者に教えることができ次の新規参加者へと受け継がれていく。子供の中には新規参加者のみではふざけるだけになることもある。メンバーが固定されやすいマイナス面もあるが、子供は年上の子供の言うことをよく聞くものであり、子供同士での技術の継承のできる環境は重要であると考えられる。

また、公園だよりでは、運営の円卓会議、季節のたより、お知らせの記事内容や数、頻度が2006～07年を境に変化があった。これは市町合併による管理者の考え方の違いが影響していると考えられる。下草管理や二入川の土溜まりの例に見られたように、異なる考えを持つ人たちの価値観をどう整合するかは大きな課題である。二入川の土溜まりは、ヤゴの羽化も見られた子どもたちの遊び場であり、公園では夏にかいぼりを行っていた。子どもたちはたくさんの生き物を捕まえられるので楽しみにしていたそうである。この状況を好ましく考える人たちにとって土溜まりはよい風景であったが、土がたまっていることが汚いと考える人にとっては改善すべき風景であった。野口氏はこうした状況を遺憾に感じつつも、異なる文化の合流は、より多様で豊かな文化となる契機であるべきと考えている。古河総合公園でも新しい公園となるためのきっかけになるための課題であると考えられる。

また公園でのボランティア活動は様々にあり、川田氏はもりもりクラブを中心に雑草抜きや外来種の駆除などを含め多くの労力を厭わず関わりを続けている。それは

御所沼が川田氏にとって子供の時から良い思い出が積み重なっている場所であり、当時の風景を思いながらこれからも大切にしていきたい場所だからであった。同様に御所沼の復元を訴えた中村氏、市役所職員として古河総合公園に関わり退職後もボランティア活動を続けている野口氏も、みなかつての豊かな環境で遊んだ経験がある。こうした子供時代の思いが成人後の行動にあらわれていることを鑑みると、子どもたちの公園との関わり方は、今後も検討していかなければならないと考える。

5. おわりに

公園と市民は、散歩、イベント企画、管理業務を日常の一部にするなど、付き合い方は千差万別である。市民が新しく公園とのかかわりを築けるかは、新たな居場所をつくれるか、新しい人間関係を築けるかをも意味している。そうした機能を公園が担うえるかは、御所沼復元を計画した中村氏の試みでもある。古河総合公園では、異なる文化を持つ市町合併など様々な環境の変化による試行錯誤は今も続いている。変化をより豊かな公園へと飛躍する契機となるために必要なことは今後の課題としたい。

本研究では、公園づくりへの市民参加において重要な要素のいくつかを抽出することができた。しかし古河は古くから豊かな歴史の舞台であった。公園内には御所沼が地域住民の入会地で栗拾いなどしてきたことや、古河公方の墓所への参拝の習慣など多くのエピソードがある。これらは現在に続く市民活動の背景であると考えられ、そうした地域の歴史を踏まえた活動のあり方の検討も今後の課題である。

参考文献

- 1) 中村良夫：湿地転生の記 風景学の挑戦、岩波書店、pp. 155-165、2007
- 2) 中村良夫、野中健司：approach 冬号2016、竹中工務店、pp. 4-19、2016
- 3) 椎木哲太郎：日本型「市民活動」の源流 1868-1951、経営情報研究、No. 7、pp. 65-82、2003
- 4) 松元一明：「市民活動」概念の形成—近接概念との関係性と時代背景を中心に—、法政大学人間社会研究科、pp.183-213、2011
- 5) 佐々木和之、仲間浩一：住民と河川行政との連携手法についての研究「琵琶湖河川レンジャー」を事例として、水資源・環境研究、Vol. 21、pp. 47-55、2008
- 6) 藤木真里、中瀬巖：有馬富士公園運営・計画協議会の議論内容からみた住民参加型公園運営の課題と展望、ランドスケープ研究74(5)、pp.793-798、2011
- 7) 菅博嗣：市民意向に基づいた公園運営管理計画の策定手法に関する研究、ランドスケープ研究、Vol.66